

1. 「われ日本海の橋とならん」 2. 「はじめての支那論」 3. 「中国が日本人の財産を奪いつくす！」
4. 「中国人はなぜ突然怒りだすのか」 5. 「チャイナ・リスク 爆発前夜」

1. 「われ日本海の橋とならん」 加藤嘉一著 ダイヤモンド社 7月22日

副題：「内から見た中国、外から見た日本—そして世界」 帯の言葉：「友よ、国を開き、心を開け」

8/18、中国東北部の吉林省と新潟の物流を進めると期待される「日本海横断航路」開設され、第1便のテディベア号が新潟東港に入港した。この日、新潟ではテープカットを始めとする盛大なセレモニーが催された。この本が出て1か月後に、念願の「日本海横断航路」が開通したわけである。私はこのテープカットの場に、加藤嘉一氏にハサミを持たせ立たせたかった。なぜなら、今後、加藤氏のような若者たちに、この航路を利用し、実際に「日本海の橋」になって欲しいと切に願っているからである。

私はこの本を、軽い嫉妬の感情を抱きながら読み進めた。それはまず加藤氏の若さに対してであり、そして米・中両国語に堪能な彼の才能に、さらに文武両道を極めていく能力に及んだ。そしてついついこの本のあら探しをしている自分をそこにを見つけ出し、恥ずかしく思った。本文中で、加藤氏は語学を習得する心得を披露している。それは怠け者の私にはとても真似ができないことであり、加藤氏の語学力は努力の賜であることがわかった。この加藤氏のような若者が、今後の日本を背負って立ってくれば、絶対に日本は安泰であると思う。

加藤氏は、「どんなに遅くとも、団塊の世代が80歳を超え、団塊ジュニアが60代に差し掛かろうとするこのときまでに大きな変化が起きない限り、この国は持ちこたえられない。すなわち日本の余命は20年なのだ。しかし今回の震災を受けて時計の針は10年進んだ。日本人は覚悟する必要がある。…(略)日本は確かに余命10年の国家となったのだ。政治も、経済も、そしてマインドセットも、抜本的な変化が求められている」と書いている。たしかに私たち団塊の世代に与えられている物理的余命も、あと10年である。そのことを私たち団塊の世代は自覚している。したがってこの若い加藤氏の挑戦状を受けて立って、あと10年以内に必ず日本を抜本的に変化させることを誓う。

加藤氏は、「それでは具体的に、10代や20代の若者が日本の復興と再生に向けてできることはなんだろうか？」と問いを発し、「逆説的な話だが、僕は“海外に出ること”だと断言したい」と書き、「いまこそ真の開国を！」と檄を飛ばしている。さらに「18歳のとき、たった一人で中国に渡った僕は、大きな確信を持っている。世界を恐れる必要はない。外国人を恐れる必要はない。日本人はもっと海外に出て行くべきだし、海外の人をもっと受け入れるべきだ。なぜならみんな同じ人間であり、いつかわかり合えるときがくるのだから。最後にもう一度だけくり返そう。この真の開国に向けたラスト・チャンスを活かせるのか。それともロスト・チャンスとしてしまうのか。他人事ではない。これは読者のみなさん方、一人一人に課せられた“宿題”なのだ」と主張している。私はその迫力に圧倒されながら、この本を読み終えた。

2. 「はじめての支那論」 小林よしのり・有本香共著 幻冬舎新書 7月30日

副題：「中華思想の正体と日本の覚悟」 帯の言葉：「ウザい隣国・中国は“支那”と呼ぶべし」

この本はゴーマニストと呼ばれる漫画家の小林よしのり氏と、ジャーナリストの有本香氏の雑談集である。本人たちも「漫画家とジャーナリストの言葉なので、専門家が語るよりは自由でおもしろいかもしれません。でも意外に深いんだぞ、ってところもありますから、まあ気軽に読んでみてください」という書き出しで始めている。

小林氏は、「わたしは以前から、日本は自分たちの生き方や幸福感のあり方を見直す時期を迎えていると思っていたんだよね。アメリカ流ルールの“グローバリズム”や、中国の経済発展一本やりの“全球化”に巻き込まれて、激しい国際競争を繰り広げながら、日本はさらなる“坂の上の雲”を目指して近代化を続けるのか。それとも経済成長を至上の命題とした近代化にブレーキをかけて、もっと緩やかな進歩でいいから、人と人の絆を築き直すような、成熟した文化を持つ社会を模索するのか」、「もはや近代資本主義は限界に達しているし、金融グローバリズムも日本人はやれた柄ではない。もちろん第2次産業でも最先端技術をはじめとして戦える部分はあるんだから、それは引き続きやればいいよ、でも、それ以外の部分は農業をはじめとする第1次産業にシフトして、半分閉じた国になっても全然かまわない」、「だからわたしは鎖国論者になるんだよ」と主張している。この小林氏の「鎖国論」を肯定するわけではないが、私も、日本はこの辺りで一度立ち止まって、真剣に「鎖国」も含めて、独自の生き方を模索してみる必要があると思っている。

有本氏はあとがきで、「私は、いわゆる“反中親米”（あるいは媚米）ではない。中国もアメリカもウンザリするほど腹黒だ。しかしその私が、つねづね支那人の中華思想にはウンザリだといいいながら、アメリカ製の“グローバリズム”はなんとなく受け入れてしまっている。それはおかしい、と小林さんは指摘した」と述懐している。このように、この本には有本氏が小林氏の思想を受容する場面、つまりジャーナリストが漫画家に言いくるめられているような場面が多い。

なお有本氏は“中国人が日本の水源を買っている”や、“ダライ・ラマの政治的引退でチベット・中国関係はどう変わるか”、“中国残留日本人孤児が殺されなかったわけ”などの見出しを掲げ、文中で持論を展開しているが、いずれも事実誤認が多い。もちろん漫画家の小林氏にも少なくない。

3. 「中国が日本人の財産を奪いつくす！」 宮崎正弘著 徳間書店 7月31日

副題：「“土地、企業、技術”の乗っ取りが加速」

帯の言葉：「震災後の混乱に乗じて中国の“日本侵略”が進んでいる」

この本は、約1/3が題名通りの内容で、残りの2/3は日本には関係のないことが書いてあり、その意味で「羊頭狗肉」の書である。また前回の「徳山ダム」の通信でも明らかにしておいたように、「和歌山、三重、岐阜の森林資源と水源地買収の実態」という見出しを掲げながら、本文にはいっさい具体的な地名が出て来ない。文中にはそのような個所が多く、今回の書は、手抜きが多いような感じがする。元来、宮崎正弘氏は現場主義で、中国のすみずみまで自分の足で歩いて、事実を検証し、それを文章化するというチャイナ・ウォッチャーであったから、私は本書を読んで、若干失望した。伝聞の類の文章がほとんどだったからである。

たとえば、「こうしてイタリアの古都は乗っ取られた」という文章では、数年前までの古都での中国人の様子が描かれており、現在すでにそこでは、かつての中国人の役割をアフリカからの黒人が演じつつあるという事実については、まったく触れられていない。これなどは現場に行ってみなければ、わからないことでもある。あるいは「バングラデシュでもインドでも、マオイストらのテロリズムが横行している」と書いているが、少なくともバングラデシュにはマオイストはいない。これも私は、現地の大学で確認済みである。

歴史の誤認もある。宮崎氏は、次期共産党主席の呼び声が高い習近平氏の父の習仲勲が、彭徳懐の側近だったため失脚を余儀なくされたと書いているが、彼はそれ以前に劉志丹や高崗の仲間として指弾されているのである。また5月に起きた内モンゴルの暴動についても、ネットやメディアから入手した程度の情報がほとんどで、現場をしっかりと見た上でのものではなく、事実誤認が多い。フフホトについても、その記述の中で、「もともとフフホトはチベット仏教の街で共産党は宗教的影響力を制御するために、仏教寺院の周囲にモスクを建てさせ意図的にイスラム教徒を入植させ人為的に民族対立を常態化するという分離支配を行ってきた」と書いているが、この文章の中の「イスラム教徒」というのは、回族のことでウイグル族ではない。読者にあたかもウイグル族を入植させたかのような印象を与えることはよくない。回族は古来から中国全土に居住しており、取り立てて入植と騒ぎ立てるほどのことではないからである。

4. 「中国人はなぜ突然怒りだすのか」 王珍華著 日文新書 4月30日

副題：「驚くべき日本と中国の習慣・風土の違い」

王珍華氏は1964年生まれで46歳、「花の60后」である。この年代の中国人には、ハングリー精神が旺盛で優秀な人が多い。彼らは文革終了後の大学で学び、改革開放の波に乗って外資とともに成長し、起業して経営者として成功している人も多い。彼らは激動の20年間を生き抜き、多くの果実を手にしてきた。彼らより前の世代は、農村に「下放」されており、大学で正式に教育を受けた人は少ない。彼らの後の世代は、簡単に外資の波に乗ることはできず、起業しても成功する人は少なくなった。そして中国経済は成熟し、若者たちはハングリー精神をなくし、「80后」の時代を迎えている。しかしこの世代には「天安門事件」に翻弄された人が多く、王珍華氏もその一人ではないかと思われる。なぜなら文中で、「やくざに等しい中国政府」、「中国共産党と名乗る独裁政権」などの憎悪に満ちた表現が散見できるからである。

王氏は、「日本にいる中国人著名人は本当のことを言わない人が多い」という見出しを掲げ、「日本では、日本で有名になった中国人が、“大学教授”、“ジャーナリスト”、“作家”、“ビジネスマン”などという文化人の肩書きで、日本や中国について発言する機会が多くなっています。しかし著者のようにペンネームを使った中国人や、台湾出身の中国人でない限り、実名で中国社会の醜悪な実態を語り、中国政府を真正面から批判することなどはできません。中国に自分の家族や親戚を残している限り、日本で発言したことがいつ何どき問題にされ、どんな口実で家族や身内といった関係者に迫害が及ばないとも限らないからです」と書いている。しかし私の知っている限りでは、日本に定住している中国人の知識人は、中国に家族を残している人でも比較的自由に発言していると思う。

王氏は、「日本人はなぜ中国人部下を別室に呼び出して叱るのか」と問いを發し、そのような日本人の態度は間違っていると、「私も、部下の中国人がだらしないミスや失敗をしでかしたときには、周囲に他の従業員がいようがいまいが叱ります」、「少なくとも重大なミスや失敗を犯した中国人従業員には、公然と叱り、ケジメをつけなければなりません」、「日本人の部下と同様に扱い、叱るときは叱る、ほめるときはほめるとメリハリをつけて接するのは当然のことなのです」と書いている。しかし私の体験から、日本人上司が中国人部下を人前で叱ることは難しいと思う。予期せぬ言い訳や反論にあって、論争になり、口下手な日本人上司が立ち往生することもあるからである。ここは多くのマニュアル本にあるように、「別室に呼び出し、個別に叱る」方が無難だと思う。

なお王氏は、この本文中で題名と同じ「中国人はなぜ突然怒りだすのか？」という見出しで一文を書いているが、明確な分析をしておらず、私にはその理由がよくわからない。

5. 「チャイナ・リスク 爆発前夜」 黄文雄著 海竜社 8月16日

帯の言葉：「超大国にのしあがった中国はついに限界を迎えた。世界は日本は、いったいどうなるのか？」

黄文雄氏は、この本に「チャイナ・リスク 爆発前夜」という題名をつけているにもかかわらず、「爆発前夜」という論拠をまったく示していない。つまりチャイナリスクについて羅列しているだけで、それがいつ爆発するかについてはどこにも書いていない。それは黄文雄氏がこの本の最後を、「もっとも根源的なチャイナ・リスクは、まさしく中国人の万古不易の中華思想にひそんでいるのではないだろうか」という曖昧模糊とした文章で締めくくっていることを見れば、よくわかる。この本もまた「羊頭狗肉」の書である。

この本にも黄文雄氏の他の著作と同様に、中国を歴史的に見た分析が多い。半分以上がそれで占められていると言っても過言ではないだろう。その意味でも、「爆発前夜」というよりも、「チャイナ・リスクの歴史的分析」という題名がふさわしい。黄文雄氏は、そのチャイナ・リスクの一例として、「暴走する人民解放軍」という項目を掲げて分析しているが、その人民解放軍が共産党政権に「どのような形で、どれぐらい、いつ」影響を及ぼすのかは明記していない。これでは人民解放軍が中国の起爆剤になると強弁してみても説得力はない。

なお文中で黄文雄氏は、「実際最初の革命根拠地・井岡山は匪賊の根城で、紅軍は農民労働者というよりもルンペンを主力とする。もっぱら略奪しか目がない匪賊集団で、共産主義革命を目指した党のエリートも頭をかかえたほどだった。紅軍の暴虐狼藉ぶりは、“三大規律、八項注意”などのつくられた“美談”が決していうほどのものではなかったことを物語る」と書いているが、これは誤りである。たしかに井岡山時代が匪賊まがいの集団であったことは事実であるが、その後、紅軍が長征に踏み切り、その中で全軍に“三大規律、八項注意”を徹底し、秩序ある軍隊に変貌していったのである。紅軍が規律正しい軍隊であったことは、後に八路軍と行動をともにした日本兵の多くが証言しているところでもある。黄文雄氏の他の歴史的な記述についても、このような独断と偏見による歴史の歪曲や誤りが多い。

さらに黄文雄氏は中国での急速なネット社会の普及を取り上げ、「愚民」が理想的な人間とされ、時代が下がり、科学技術の進歩発展と共に、言論鎖国ますますきびしく、ことに中国政府は“サイバーウォー”の開発が最終防衛の手段ともなる。もしネット空間が農村にまで広がり、中国人の愚民化ができなくなると、中国はいったいどうなるだろうか」と書いている。もし黄文雄氏が題名に忠実ならんとするならば、このような疑問形で文章を終わるのではなく、「ネットが農村に普及し、この数年で愚民がなくなり、チャイナ・リスクは爆発する」と書くべきである。

黄文雄氏は「蔓延する“亡党亡国”の危機感」という項で、最初に「経済危機や経済崩壊の危険状態から中国国家崩壊論を説く者が多い。たとえば不動産バブル、インフレなどからドミノ式に経済、社会から政権さらに国家の崩壊へと説くのもその一例である」と書き、最後に「清朝が滅びたのは“黄金の十年”といわれる最後の経済繁栄がもたらした社会大変動が主因だった。むしろそれが歴史の鑑ではないだろうか」と締めくくっている。この最初と最後の文章は明らかに矛盾していると私は考える。

以上